

詩集日本漢詩

孤山先生遺稿
遠思樓詩鈔
淡窓小品

梅墩詩鈔
梅墩遺稿
珮川詩鈔

詩集日本漢詩

第十一卷

富士川英郎・松下 忠・佐野正巳編

江苏工业学院图书馆
藏书章

汲古書院刊

詩集 日本漢詩 第十一卷（第一期第十二回配本）

昭和六十二年十月 発行

定価八、五〇〇円

編者 富士川 英郎

松 下 忠

佐 野 正 巳

解題 富士川 英郎

発行者 坂 本 健 彦

印刷 モリモト印刷株式会社

発行 汲古書院
102 東京都千代田区飯田橋二一五―四
電話（三五）九六四 振替東京五二五〇三五

解題

富士川英郎

本巻には九州の儒者たちの詩文集が収められている。

孤山先生遺稿

著者

藪孤山（一七三五一—一八〇二）、名は懋、字は士厚、通称は茂二郎、孤山、朝陽山人と号した。肥後の熊本藩士藪愼庵の次男として享保二十年に生まれ、宝暦七年、二十三歳にして藩命によって江戸に学び、翌八年、京都に遊んで、三年間、留学した。宝暦十三年、熊本藩の藩校時習館の助教に任ぜられ、明和三年に教授に進んだ。安永四年に山陽地方を経て、京摂に遊び、殊に大坂では中井竹山、中井履軒、頼春水、尾藤二洲らと親しく交わった。孤山は朱子学を奉じ、時習館において多くの有為の人材を育成することに力を尽した。著書に『孤山先生遺稿』十六卷、『崇孟』一卷、その他がある。

内容その他

全十六卷から成り、卷之一から七までに詩が収められ、卷之八から十二までに、笥子、書牘、記、題跋、その他の散文が集められている。そして卷之十三以下は、「凡鳥館集」であるが、これは孤山が若くして江戸や京都に遊んでいた頃に執筆した詩文稿である。

この『孤山先生遺稿』の巻頭に掲げられている島田貞孚の序文によれば、このかなりな量の孤山の詩文は、彼の生前には上梓されず、その歿後、その嗣子泰紀がそれらを輯録して、出版しようとしたが、不幸にして彼もまた、その実現を見ずして死んでしまい、孤山の遺稿はそのまま空しく筐底に埋れていたのだという。その後、孤山の旧友だった江戸の古賀精里と芸藩の頼春水の慫慂によって、孤山の曾ての門弟であり、当時、熊本藩の中老兼大奉行となっていた島田貞孚の手によって、この『孤山先生遺稿』が上梓される運びになったのであった。ところで、この『孤山先生遺稿』卷之十六の奥付にはその発行の年月が記載されていないが、島田貞孚の序文は文化丙子（十三年）仲春に書かれており、本書が上梓されたのも、たぶん、その年内のことであつたろう。

書 誌

使用底本 慶応義塾大学斯道文庫安井文庫本 ヤ22L/2/10/6 存七卷（卷八―十二・十五・十六）、大六冊。欠けている卷（卷一―七・十三・十四）は、他本で補う（大六冊）。香色表紙。題簽は左肩に双辺の摺題簽「孤山先生遺稿 一」（第一冊）。見返は双辺の枠内を三分割し「肥後府藪文学 千里必究 不許翻刻（摺）／孤山先生遺稿／時習館蔵刊」。序目は文化丙子（十三年）島田貞孚撰、男島田貞雅謹書、孤山先生遺稿凡例、孤山先生遺稿目録がある。版心下象鼻に時習館蔵と記されている。跋文はない。奥付は第十二冊（最終冊）だけにあり、四周単辺の枠内中央に「時習館蔵板」左隅に「大阪書賈 高麗橋壺丁目 藤屋弥兵衛梓」とある。54%縮小。

諸本

一、静嘉堂文庫本 54/45 十六卷 大十二冊 香色表紙。見返、序、本文は使用底本と同版。奥付も第十二冊後表紙にあり、底本と同じ時習館板。大阪書賈藤屋弥兵衛梓である。文化十三年序刊本。以下にあげた諸本もすべて同版本である。

二、内閣文庫本 206/225 十六卷 大十二冊 香色表紙。見返から本文に至るまで使用底本と同じ。奥付は第十二冊にあり静嘉堂文庫本と同版。蔵書印は表紙に「昌平坂」「番外書冊」（共に黒印）。

三、国会図書館鵜軒文庫本 詩文/1091 十六卷 大十二冊 香色表紙から序目、本文、奥付に至るまで使用底本と同版。表紙は虫の害を受けているが印面は鮮明である。蔵書印「松江/氏/文庫」（陽刻方印）。

四、国会図書館本 237/55 十六卷 合大六冊 香色の元表紙がついた十二冊本を帝国図書館用茶色表紙で二冊ずつ合綴してある。題簽は剝落している冊やまちがえて貼布した冊等、混乱している。序目、本文、奥付に至るまで使用底本と同版、後印本。

五、慶応義塾図書館本 151/90 十四卷 大十一冊 香色表紙から本文まで使用底本と同版だが、目録は卷十四凡鳥館集二までであり尾題はない。奥付は卷十四末に梓はなく「江戸日本橋壺早目/須原屋茂兵衛/大坂心斎橋博労町南江入/河内屋茂兵衛/京都錦小路魅屋町東へ入/伏見屋祐七」三都三書肆連名である。

遠思楼詩鈔

著者

広瀬淡窓（一七八二—一八五六）、名は建、字は子基、通称は求馬、淡窓、苓陽、青溪、遠思楼主人と号した。天明二

年に豊後国日田に生まれたが、家は代々、諸侯の用達を務め、その屋号を堺屋（のちに博多屋）と言った。当時、幕府の直轄のもとにあった日田における屈指の旧家であったが、淡窓の祖父久兵衛、伯父平八、父三郎右衛門はいずれも風雅の士で、みな俳句を善くした。淡窓も早くから詩才をあらわし、十二歳の頃、高山彦九郎が日田に来て広瀬家を訪れたとき、一日に百詩を詠じて、彦九郎を驚かせたという。しかし、淡窓は生まれつき病弱であったために、家督を次弟の南陔に譲って、自分は儒者として立ち、十六歳のときに博多の亀井塾に入って、亀井南冥・昭陽父子に学んだのち、日田に帰って私塾を開き、その一生を悠々として、子弟の育英のうちに過したのであった。最初は成章舎、ついで桂林園、最後に咸宜園と称したその塾には、淡窓の温雅な人柄と高い識見を慕って従学する者が多く、やがてそれは江戸末期の私塾のうちで最も盛大で、最も完備したものとなって、淡窓の名が天下にとどろいたのであった。この塾に学んだ者のうちには、高野長英、大村益次郎、長三洲などがある。

淡窓は安政三年に七十五歳で歿したが、その著書には『遠思楼詩鈔』正統二編のほか、『約言』『淡窓小品』『淡窓詩話』などがあり、大正十四年から昭和二年へかけて、日田郡教育会編の『淡窓全集』全三巻が出た。

内容その他

初編は天保八年に刊行され、乾坤の二冊から成っている。乾巻の巻頭に篠崎小竹、亀井昭陽、及び豊後国日出藩の儒者で、のちにその家老となった帆足萬里の序文が掲げられている。また坤巻の巻末には、題辭として菅茶山の七絶二首が収められているが、これは茶山の『黄葉夕陽村舍詩遺稿』の巻七にも、「題「広瀬子基詩巻後」」として載っているもので、茶山の最晩年、文政十年に作られた詩である。

二編は嘉永二年に刊行され、同じく乾坤の二冊から成っている。

乾巻の巻頭には菅茶山、亀井昭陽、帆足萬里、峯長卿（加峯亮）、中子玉（中嶋米華）、麻彦国（麻生彦国）の、淡

窓の詩に対する評語を載せているが、峯長卿以下の三人はいずれも咸宜園で淡窓に学んだ人たちである。また坤巻の巻末には篠崎小竹の跋文と、紀伊国の詩人菊池溪琴の「題遠思樓集後」という五絶六首が収められている。

淡窓の詩風は一方に偏せず、当時、殊に江戸の詩壇がほとんど宋詩の影響下にあったのに反して、唐詩を主体として、その後の宋や明の詩の長所を採り入れたものであった。それは彼自身がその『淡窓詩話』のなかで、「抑々正徳享保ノ詩ハ、格調アリテ性情ナク、天明以後ノ詩ハ、性情ヲ主トシテ、格調アルコトヲ知ラズ。是レ皆一偏ニシテ中ヲ得ザルモノナリ。予ガ好ム所ハ、性情ヲ主トシテ、格調ヲ廃セズ、二ツノモノノ中ヲ取ルナリ。享保ハ明ヲ学ビ、天明ハ宋ヲ学ブ、予ハ唐人ヲ主トシテ宋明ヲ兼用ス」と言っている通りであるが、そうした淡窓の詩には、菅茶山が蘇東坡の言葉を引いて、「織襪を簡古に発^{ひら}き、至味を澹泊に寄す」と評し、俞曲園が「平淡の中に自ら精彩あり」と言った趣きのあるものが多く、それは陶淵明、王維、孟浩然、韋応物、柳宗元という系列の山林と田園の詩人たちに共感するところが多かった彼自身の性情の表現であったと言えることができるだろう。

書誌

使用底本

初編 慶応義塾大学斯道文庫本(A) 22L/f3 二巻 半二冊 黄色表紙。題簽は左肩に双辺の摺題簽「遠思樓詩鈔

乾」(坤)。見返は縹色紙使用、双辺の枠内を三分割し「淡窓広瀬先生著／遠思樓詩鈔初編／浪華書房 群玉堂全梓」

欄上に天保丁酉(八年)新鐫と刊年がある。上巻の序文は天保六年篠崎弼、亀井昭陽、帆足萬里、凡例は天保丙申

(七年)小林勝、跋文は菅晋師。奥付は「天保九戊戌年秋八月発兌 刻竣」の次に群玉堂河内屋茂兵衛、青藜館今

津屋辰三郎の外に大阪、京都、江戸三都三名の書林名がある。天保八年に刊行され、翌九年に発売された。天保

八年に発売された本があるかどうか未見だが本書も早印本である。天保八年刊、九年印本。62%縮小。

二編 某氏藏本 二卷 半二冊 黄色表紙。題簽は左肩に双辺の摺題簽「遠思樓詩鈔二編 乾」(坤)。見返は紫色紙使用、四周双辺の枠内を三分割し「淡窓広瀬先生著／遠思樓詩鈔二編／江都書林 千鍾房 浪華書林 群玉堂合梓」となっており大阪の青黎館が江戸の千鍾房、須原屋茂兵衛に移っている。諸家評語、弘化丁未(四年)劉翥の凡例、弘化四年篠崎弼、嘉永己酉(二年)菊池定の跋文がある。奥付は「豊後 広瀬求馬著」に続いて「嘉永二年己酉六月／発兌書肆／大坂心斎橋通博労町／河内屋茂兵衛／江戸日本橋通壱丁目／須原屋茂兵衛」と見返と同じ書林名がある。嘉永二年刊本。59%縮小。

諸本

一、慶応義塾図書館本(A) 32／49 初編二卷 半二冊 黄色表紙。題簽は左肩に墨書。見返はなく遊紙一枚に「二畝林外堂主人蔵」と朱書がある。序文から跋文までは使用底本と同版。奥付は使用底本と同じ天保九年八月の奥付が付されている早印本である。上巻には墨筆書入れが稀にあり下巻には全体にわたって朱筆の書入れがあるが上下巻の字様は異なる。蔵書印は「佐々木氏／蔵書印」(陽刻方印)「瀬高／正学」(黒文方印)最終丁綴じめの近くに「探寧」(墨筆)とある。(天保八年)刊、九年印本。

二、慶応義塾図書館本(B) 65／81 初編二卷 半二冊 黄色表紙。左肩に四周双辺の摺題簽。見返は緑色紙使用で、使用底本と同じ天保八年の刊年がある。序文から跋文に至るまで使用底本と同版。巻末に河内屋茂兵衛蔵板の出版広告が八丁付されている。奥付は京都河内屋藤四郎から大阪河内屋茂兵衛まで三都十一書肆連名である。見返にある青藜館の今津屋辰三郎の名前が奥付にはないので本書は後印本と考えられる。蔵書印「杉山／氏印」(陽刻)。天保八年刊後印本。

三、慶応義塾図書館本(C) 168／88 初編二編各二卷 半四冊 黄色表紙。初編の上冊は墨筆題簽、下冊は摺題簽だが一部剥離。二編上冊には題簽はなく、下冊は摺題簽。両編の見返は紫色紙使用で、使用底本と同じ。両編とも序

文から跋文に至るまで使用底本と同版。奥付は両編とも同版で「豊後 広瀬求馬著」から始まる嘉永二年六月のものであり、使用底本二編の奥付と同じである。蔵書印は「名越/時成」(陽刻方印)「藻齊」(陽刻長方印)「清野/文庫」(陽刻方印)。初編は天保八年刊、嘉永二年印本。二編は嘉永二年刊。

四、慶応義塾図書館本(D) 80/24 初編二編各二巻 半四冊 黄色表紙。前掲の(C)本と表紙から奥付に至るまで同版である。蔵書印「容藤/庵図/書記」(陽刻方印)。

五、静嘉堂文庫本 54/59 初編二編各二巻 半四冊 黄色表紙。見返は両編とも緑色紙使用で印面は使用底本と同じ。序跋、本文も使用底本と同版である。初編は巻末に河内屋茂兵衛蔵板の出版広告が四丁付されている。これは慶応義塾図書館(B)本と同じである。奥付は初編・二編とも同じで京都河内屋藤四郎、江戸須原屋茂兵衛、大阪河内屋茂兵衛等、三都書林十一名の連名である。初編天保八年刊、二編嘉永二年刊、後印本。

六、都立中央図書館東京誌料本 4634/9 初編二編各二巻 半四冊 後補縹色表紙。墨筆題簽。見返は初編上冊のみで二編にはない。「淡窓広瀬先生著/遠思楼詩鈔 全四冊/江都書林 浪華書林 千鍾房 合梓」。全四冊という記述から両編を合わせて出版されたことがわかる。奥付は初編ではなく二編下冊にある。静嘉堂文庫本と同じ十一名連名であるが、静嘉堂文庫本にある江戸英大助が江戸和泉屋吉兵衛に代っている。最終の書林名は河内屋茂兵衛板となっている。他は使用底本と同じである。蔵書印「名和氏眠山/書屋蔵書記」(陽刻長方印)。初編天保八年刊、二編嘉永二年刊、後印本。

七、都立中央図書館加賀文庫本 加賀/11024 初編二編各二巻 半四冊 黄色表紙。左肩に四周双辺の摺題簽「淡窓

六種 遠思楼詩前編 卷之壹 (第一冊)。二編は統編卷之三、卷之四となっている。見返はない。序跋、本文は使用底本と同じ。奥付はない。蔵書印「好尚堂/図書記」(陽刻長方印)。初編天保八年刊、二編嘉永二年刊、後印本。

八、富士川英郎蔵本 初編二編各二巻 半四冊 黄色表紙。初編二編とも、見返から跋文に至るまで使用底本と同

じ。奥付は両編とも同版で、使用底本二編の奥付と同じ嘉永二年六月である。

九、内閣文庫本 206／321 初編二巻 半二冊 黄色表紙。見返は緑色紙使用で使用底本と同じ。奥付は下巻後表紙見返にあり、書籍広告が三行あり左隅に「浪華書肆心齋橋通博労町角河内屋茂兵衛板」とある。江戸の奥付の様に思われるが広告一行目の「早引人物故事」の著者が「東京川関先生著」となっており、明治の奥付と考えられる。他は使用底本と同じ。蔵書印「浅草文庫」（陽刻方印）。天保八年刊、明治印本。

十、国会図書館鵜軒文庫本 詩文237 初編二編各二巻 半四冊 黄色表紙。見返は初編のみで朱色紙を使用。双辺枠内を三分割し「淡窓広瀬先生著／遠思楼詩鈔／江都書林 千鍾房 浪華書林 群玉堂合梓」とある。奥付は初編二編ともにない。他は使用底本と同じである。初編天保八年刊、二編〔嘉永二年〕刊。

十一、慶応義塾大学斯道文庫本(B) 22L／f1 初編二編各二巻 半四冊 黄色表紙。本書は表紙から奥付に至るまで鵜軒文庫本と同じである。

十二、慶応義塾大学斯道文庫本(C) 22L／f4 二編 半二冊 黄色表紙。見返、奥付はない。序文から跋文に至るまで使用底本と同じ。〔嘉永二年〕刊、後印本。

十三、慶応義塾図書館本(E) 167／63 初編二編各二巻 半四冊 黄色表紙。題簽は双辺の摺題簽だが前掲の版と異なる。「遠思楼詩鈔 初編 乾」（坤）、「同 貳編 乾」（坤）。見返は初編のみ、四周双辺の枠内を三分割し「広瀬淡窓先生著／遠思楼詩鈔／浪華書肆 青木嵩山堂蔵」朱色紙使用。奥付は初編にはなく二編坤巻にあり、「和漢洋書籍出版所 発行者 青木恒三郎 製本発売所 嵩山堂本店 支店（東京 四日市）」となっており明治時代の出版であることがわかる。他は使用底本と同じ。蔵書印「原口／令成」（陰刻方印）、「原印／令成」（陽刻方印）。初編天保八年刊、二編嘉永二年刊、明治印本。

十四、慶応義塾図書館本(F) 182／70 初編二編各二巻 半四冊 黄色空押行成表紙。題簽、見返、序跋、本文まで

前掲の(E)本と同版である。奥付は二編下冊後表紙見返にある。「和漢洋書籍発売処／東京帝国大学 京都帝国大学／高等師範学校 第一高等学校／学習院 帝国図書館／御用書肆／発行印刷者 青木恒三郎／製本発売所 青木嵩山堂(東京 大阪)」と明治の奥付であり帝国図書館の名前がみえることから明治三十年以後の出版であることが知られる。初編天保八年刊、二編嘉永二年刊、明治三十年以後印本。

十五、慶応義塾図書館本(G) 22／6 写本(安政二年) 初編二編各二巻 半四冊 濃縹色表紙。左肩に墨筆題簽「遠思樓詩鈔 初編 乾」(第一冊)。初編は左右双辺の薄茶色の卦箋を使用、有界九行十九字内外。二編は無辺無界、八行二十字内外。訓点圈点等、各編の序文から跋文に至るまで版本と同じであり、版本写しである。初編乾巻の最終丁、尾題の前に「安政二乙卯六月於佐江敬勝齋写之」と奥書がある。蔵書印「極翠／園蔵／書記」(陽刻方印)。

淡窓小品

著 者

広瀬淡窓(前出)。

内容その他

乾坤二冊から成り、嘉永二年の奥付を付して刊行された。

淡窓が漢文で書いた小論、随筆、序跋の類を集めたもので、淡窓の義子孝之助が編集したが、このとき淡窓はなお

存命しており、自らこの書を「鼠壤餘蔬^{そじょうよそ}」と名づけたという。『莊子』の「天道篇」のなかの「鼠壤有餘蔬、而棄妹、不仁也」という言葉に拠ったのだろう。

坤巻の巻末には、「附録」として、五十余首の詩が収められているが、これは『遠思楼詩鈔』正統二篇に収められた詩以後に淡窓が作ったものであるらしい。

書 誌

使用底本 富士川英郎蔵本 二巻 半二冊 黄色表紙。左肩に双辺の摺題簽「淡窓小品 乾」(坤)。見返は双辺の枠内を三分割した緑色紙に「荅陽広先生著／淡窓小品 全二冊／浪華書林 羣玉堂製本」。劉龍の序文、安政乙卯(二年)広瀬孝之助の凡例がある。跋文はない。奥付は「豊後 広瀬求馬著」に続いて「嘉永二年己酉六月／発兌書肆／大坂心齋橋通博労町／河内屋茂兵衛／江戸日本橋通壱町目／須原屋茂兵衛」と『遠思楼詩鈔二編』とほぼ同じ奥付が付されているが、広瀬孝之助識の凡例が安政二年の執筆であるところから推察すれば、この奥付は河内屋茂兵衛が二編に使用したものを流用したと思われる。安政二年序刊本。59%縮小。

諸本

一、国会図書館鵜軒文庫本 詩文237 二巻 半二冊 黄色表紙。題簽は使用底本と異なり「遠思楼詩鈔三編 乾」(坤)となっている。見返はない。奥付は双辺枠内に「和漢西洋書籍売捌處／群玉堂河内屋大坂心齋橋博労町角岡田茂兵衛」とあり、明治の奥付である。他は、使用底本と同じである。安政二年序刊本、明治印本。

二、慶応義塾大学斯道文庫本 22L/f1 二巻 半二冊 黄色表紙。表紙から奥付に至るまで鵜軒文庫本と同じである。

梅墩詩鈔

著者

広瀬旭莊（一八〇七—一八六三）、名は謙、字は吉甫、通称は謙吉、旭莊、梅墩と号した。文化四年、豊後国日田に生まれた。広瀬淡窓の季弟である。文政六年、十七歳のときに筑前の亀井昭陽に学び、同十年に備後国の菅茶山のもとに至って、教えを受け、またその最後の病床に侍した。天保元年、郷里の日田において、兄淡窓が隠居したあとをうけて、その咸宜園を監督したが、天保七年には三十歳で泉州の堺にて帷を下し、篠崎小竹、摩島松南、仁科白谷、浦上春琴などと交わった。翌八年、旭莊は江戸に遊んで、林檎宇、安積良斎、岡本花亭、羽倉簡堂、梁川星巖、大槻磐溪らと往来して、大いにその才名をうたわれた。やがて旭莊は日田に帰り、翌天保九年にあらためてまた浪華にて帷を下し、さらに天保十四年から弘化三年までの足かけ五年間、再び江戸に滞在したが、その後は主として浪華に住んで、その塾生を教えながら晩年に及び、文久三年、五十七歳にして、その池田の僑居で歿した。

広瀬淡窓と旭莊は、世に広瀬兄弟として称せられたが、その性格や人柄において、このふたりの兄弟はほとんど対照的と言ってもよいほど、異なっていたようである。兄の淡窓が温厚篤実な人柄の奥に犯すべからざる気概を蔵していたのに対して、旭莊は才気煥発であるとともに、覇気がその全身に溢れ、しばしばひとと争うことも辞さない圭角の多い人物であつたらしい。そして彼ら兄弟のこうした性格の差は、その詩のうちにも自ら現われていたのであつた。おのずか

旭莊の著書には、『梅墩詩鈔』『梅墩遺稿』のほかに、『塗説』『追思録』『九桂草堂隨筆』『日間瑣事備忘録』などがあり、昭和五十九年から『広瀬旭莊全集』が思文閣出版から刊行されつつある。

内容その他

初編から四編まであり、各編それぞれ三巻から成っているが、三編までは門人坪井信良（著名な蘭学者坪井信道の子）と伊東子高が編集校定し、四編だけは同じく門人劉君平と柴東野の校定となっている。初編から四編に至るまで、旭莊の広い交友を反映して、篠崎小竹、菊池溪琴、安積良斎、鈴木茶谿、林藕漢、大槻磐溪、劉石舟、草場佩川、斎藤拙堂、筑井清等の序跋が載っている。

内容の詩は編年体に配列され、文政丁亥（十年）から嘉永壬子（五年）に至っている。

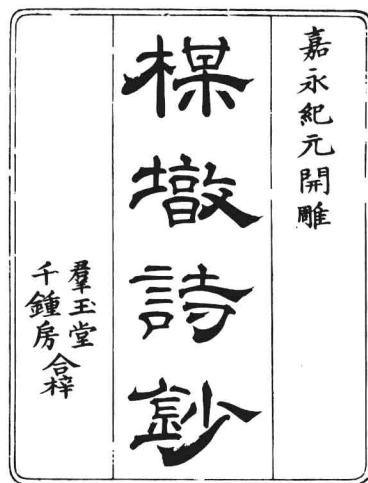
旭莊の詩はそのぜんたいに才気が横溢し、縦横の奇智が閃いているものが多く、曾て兪曲園はその『東瀛詩選』のなかで、旭莊を「東国詩人之冠」となし、「吉甫詩才氣横溢、変幻百出、長篇大作極五花八陣之奇、而片語單詞又雋永可味」と言って、その詩を推称した。

書誌

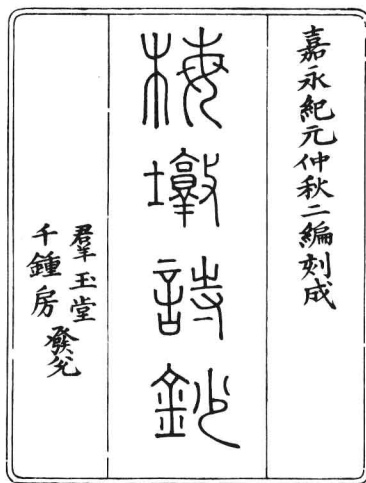
使用底本 慶応義塾大学斯道文庫本 22L/f13 初編—四編各三巻 大十二冊 縹色小菊文空押行成表紙。左肩に単辺の摺題簽「梅墩詩鈔 初編 上」（第一冊）。見返は各編黄色紙を使用、次頁に図版で示した。

序文は初編弘化丁未（四年）、二編弘化五年、嘉永元年、三編嘉永元年、四編嘉永五年、跋文は初編弘化五年、二編三編（年月不記）、四編嘉永三年とそれぞれ各編にある。初編の奥付は右側に「梅墩詩鈔^{二編}三冊^{三冊}」と書名があり左側に「嘉永元年戊申五月刻成」と刊年があり続いて東都書林、須原屋茂兵衛、浪華書林、河内屋茂兵衛、二名連名である。この奥付は二編、三編にも使われている。四編の奥付は初編の奥付と同じ形式で書名の下に「五編三冊嗣出」と予告をし、刊年は「安政三丙辰正月刻成」、書林名は前編と同じ二書林名である。蔵書印「春日／井氏／図書」

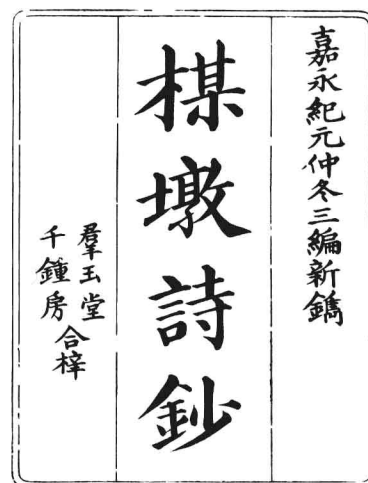
（陽刻方印）。初編—三編嘉永元年刊、四編安政三年刊。61%縮小。



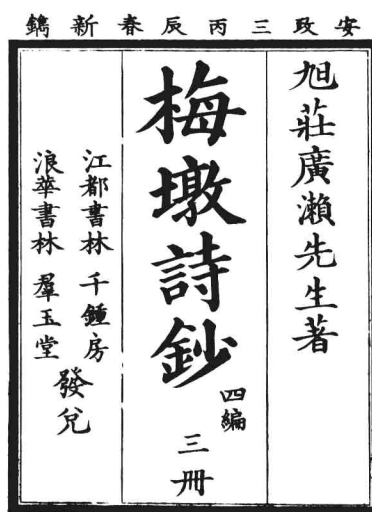
初編見返



二編見返



三編見返



四編見返

諸本

一、都立中央図書館加賀文庫本 加賀11631 初編—四編各三卷 大十二冊 表紙、題簽、序、跋、本文は使用底本と同じ。見返は各編黄色紙紙使用。初編は双辺枠内を三等分し「嘉永紀元戊申新鐫／梅墩詩鈔／不許翻刻千里必究」となっており三行目に書林名がない。二編以下四編までの見返は使用底本と同じである。奥付は初編は使用底本

と同版だが書名の冊数の下に「嗣出」の二文字がある。二編三編は初編と同じ形式で右側に「豊後 広瀬謙吉 著」、左側に「嘉永紀元戊申歳十一月」と刊年があり、発兌書肆は初編と同じ二書林名である。四編は使用底本と同じである。蔵書印は「良／斎」（陰刻方印）、「島尾氏／蔵書」（陽刻長方印）。初編—三編嘉永元年刊、四編安政三年刊本。

二、静嘉堂文庫本 54／59 初編—四編各三卷 大十二冊 後補茶色表紙。左肩に墨筆題簽「梅墩詩鈔初編上」（第一冊）。見返は各編加賀文庫本と同版であり、序文から跋文に至るまでは使用底本と同版、各編の奥付はない。初編—三編嘉永元年刊、四編安政三年刊本。

三、国会図書館鶯軒文庫本 詩文／3003 初編—四編各三卷 大十二冊 各編の表紙から奥付に至るまで使用底本と同版本だが、初編の奥付は加賀文庫本と同じで書名、冊数の下に「嗣出」の二文字がある。初編—三編嘉永元年刊、四編安政三年刊本。

四、国会図書館本 138／4／41 初編—四編各三卷 合大四冊 各冊の元表紙は使用底本と同じだが、帝国図書館用茶色表紙で各編四冊に合綴されている。見返から跋文に至るまで使用底本と同版。しかし二編の奥付は、底本の四編に使われている安政三年の奥付が使用されている。三編は使用底本と同じだが、四編には初編と同じ奥付が使用されていて刊年の参考にはならない。印面はやや不鮮明である。初編—三編嘉永元年、四編安政三年刊、後印本。

五、故長澤規矩也先生蔵本 三編三卷 大三冊 表紙、見返から跋文に至るまで使用底本と同版本。奥付は加賀文庫本の二編三編と同じ「嘉永紀元戊申歳十一月」である。零本であるが摺の状態は非常に良い本である。嘉永元年刊本。

六、慶応義塾大学斯道文庫浜野文庫本 22L／f5 初編—四編各三卷 半八冊 表紙は濃縹色雲形空押行成表紙。題